

伊藤文彦

BUMP OF CHICKEN が持つ歌の力

はじめに

私の好きな音楽グループに BUMP OF CHICKEN (以下 BUMP) という四人組がいる。1994 年にグループが結成されて以来彼らは日本のポピュラー音楽をけん引してきた。私をはじめ BUMP の音楽を聴いたのは 2005 年の高校 1 年生のころであり、友人とカラオケに行った時に BUMP の「天体観測」を友人が歌い、その切ないメロディに私が感動したからである。はじめて CD を買ったのも BUMP の CD で、「車輪の唄」という曲であった。大学 3 年生となった今でも BUMP の曲は聴くし、カラオケでもよく歌う。ドラマや CM の主題歌にもよく抜擢される BUMP の音楽。彼らの曲がなぜここまで人を惹きつけるのか、そして BUMP が日本の若者に与えた影響を考察して、BUMP がこれから先どのような道をたどっていくのか推察したい。

BUMP OF CHICKEN とは

BUMP OF CHICKEN とは、1994 年に結成された日本のオルタナティブロックバンド。ボーカルの藤原基夫、ギター増川弘明、ベースの直井由文、ドラムスの升秀夫の四人組で構成されている。トイズファクトリー所属。基本的には地上波テレビには出演しないため、ラジオや雑誌、インターネットなどを中心としたプロモーション方法が採られている。(ウィキペディアより 2007)

失恋や悲恋、または挫折などをテーマにした曲が多いが、曲調は柔らかなものが多く聴きやすい。なんといってもボーカルの藤原基夫の声が印象的であり、人間ならだれもが持つ弱さやネガティブな部分をはっきりと歌っていてそこが聴く人に不思議な安心感を与えていると私は考えている。

「天体観測」の大ヒット

『天体観測』(てんたいかんそく) は、日本のバンド、BUMP OF CHICKEN が 2001 年 3 月 14 日にリリースした、メジャー 2 枚目、通算 3 枚目のシングルである。

BUMP OF CHICKEN のシングル作品では現時点で最大の売上を記録しており、BUMP の楽曲では知名度が高い曲の 1 つである。翌年にかけてロングヒットし、その後も新作が出る度に連動する形で 50 位 - 200 位圏内にランクアップすることがあった。(ウィキペディアより 2007) この曲は人によって解釈が分かれるかもしれないが、カップルが天体観測をした帰りに彼女が交通事故で亡くなり、ひとり取り残された男の心情が描かれた歌である。明るいいントロやサビとは裏腹にやや暗い内容である。しかし、曲の最後では前向きに生きていくという旨の事が歌われているので、非恋ではあるが前向きな歌でもあるといえる。この曲はフジテレビ系ドラマ「天体観測」の挿入歌であり、また太鼓の達人(バンダイナ

ムコ) や BEMANI シリーズ (コナミ) などの音楽シュミレーションゲームなどの楽曲を提供している。2002 年 2 月には「天体観測」などが収録されたメジャー1 作目のスタジオ・アルバム *jupiter* が発売され、初のオリコンアルバム週間チャート初登場 1 位を記録している。(ウィキペディアより 2007)この頃から BUMP は知名度を伸ばしていった。

BUMP の曲に込められた想い

BUMP の曲にはボーカル・作詞を担当している藤原基夫のさまざまな想いが込められている。今回は、「三ツ星カルテット」「R.I.P.」の二曲から歌詞に込められた藤原基夫の心境を実際のインタビュー記事とあわせて考えていきたい。

まず、三ツ星カルテットという曲について藤原基夫は以下のように述べている。

藤原基夫 (以下、藤原)「(三ツ星カルテットについては) 以前あったフレーズを曲にしました。あったフレーズっていうのは歌詞、言葉です。僕らはずっと呼び合って 音符という記号になった/喉震わせて繋がって 何も解らなくなった まであったな。その一節が、ずっと残ってたんですけど。それはもうものすごい古いです。(orbital period) よりもたぶん前です、はい。すごい古くから、もう既に、詞として自分の中であって、どういうふうな時に書いたのか全然覚えてないんですけど」

インタビュアー：それが今回、こうやって完成した経緯っていうのは？

藤原「だから、もうなんか。……まずね、その曲を作る前日にバンドのミーティングがあって、10 年以上やってるとやっぱいろんなことがあって、壁にぶつかるメンバーもいたりして。スポ根漫画じゃないですけど、血と汗と涙のストーリーみたいになる時もある訳ですよ、友情とね、愛情と。そういう夜がまさにあって。すげえいい夜だったんですけど。大切に、必要な夜だったんですけど。で、素晴らしい話し合いを僕らはしたんですけど。まあ俺は、それを、聞いている感じだったの。当然自分も思うことは言いましたけどね。それで翌日はまた作業をしていて、みんなで。曲のプリプロをやっていて。2,3 曲ぐらいまとめて、リズム隊が作業してたんですけど、プリプロの。その時に俺はその前の晩のことを考えながらずっとギターを弾いていて。そのギターは最初は単なる遊びだったんですけど。遊んで、こんなアルペジオどうだろうって弾いてて。それがこの‘三ツ星カルテット、のイントロになるアルペジオだったんですけど、(あれ、これ曲になっちゃうな) みたいな感じで、そのアルペジオに引っ張られて、大昔に書いたその歌詞のことを思い出して。それを合わせて歌って、できた曲です、三ツ星カルテット、だから前の晩の体験がそのアルペジオを呼んで、そこから歌詞を引っ張り出された、みたいな感じです、はい。」
(ROCKIN`ONJAPAN、2011)

この三ツ星カルテットという曲は、ギターや手拍子が印象的でどこか明るい曲である。藤原基夫は宇宙に対して強い思いを抱いている。宇宙とは人類にとってはまだまだ未知の領域であり、そこには人類の夢や希望が詰まっている。また永遠に人間には届かないのだという切なる想い…曲のなかに出てくる、「僕らはずっと呼び合って音符という記号になっ

た」というフレーズには、宇宙という果てのない世界で友人や恋人に巡り合えた奇跡、そして出会いがもたらす喜び、人間としての成長を「音符という記号になった」という言葉で表している。この曲には藤原基夫が、BUMP のメンバーに巡り合えた喜びが込められていると考える。10 年以上も連れ添ってきた仲間との切磋琢磨があってこそ完成した歌である。

人との出会いは、必ずしも良い結果に終わるわけではないのかもしれないが、私たちが今の家族や友人、恋人に出会ったのは紛れもない奇跡であり、そこには宇宙の神秘が働いているように思えてならない。BUMP OF CHICKEN とは宇宙のメッセージを歌にのせて伝えてくれる稀有な存在なのかもしれない。

次に R.I.P. という歌について論じたい。

藤原はインタビューで R.I.P. について以下のように答えている。

インタビュアー「で、二曲目が R.I.P. で。このアルバムのひとつの特徴である。」

藤原「うん、過去を基軸にして何かを表現していくっていうね。」

インタビュアー「という、これがほんとに僕はポイントだと思うんだけど。当然これは、最初の頃に書いた曲だよ。」

藤原「そうです。だから、単に懐かしいというものではないでしょう？ 思い出すことが必要だったから思い出して。なんでそれが必要だったかという、それが今必要な作業で。現状を乗り越えとか、そういうためにね。で、それがなんでそんなに強い気持ちになったかという、やっぱ 30 になった、それが四人全員同時で。俺以外の三人、俺にとってめちゃめちゃ大きい存在で、そいつらと濃厚な時間を過ごしていると、そうやって振り返る時も、その作業はものすごい濃厚で、高純度なもので、共通の記憶も多いし、共通の経験値も多いし。30 になって改めて振り返るっていうのは、いろいろな人がすることだと思うんですけど、僕らの場合は、それがものすごい巨大なものとして返ってきたんですね。自分に。いろんなパターンがあると思うんですよ。それによって首を絞められちゃう人もいると思うし。僕らはほんとにねえ、これはご褒美なんじゃねえかと。ずっと一緒に、頑なにずっと一緒にいたご褒美なんじゃないかな、というぐらい、その過去が教えてくれた今が……自分らは今、すげえかけがえのない奴らと一緒にいるんだなあという、せつなさとうれしさと、そういうもの包まれて。それでもう胸はいっぱいになって。そういうのが同時期にぶわーっ！ って出ました。」 (bridge2010)

この曲はギターの疾走感が心地よくて、全体的におだやかな曲調である。

藤原もインタビューで言ってるように、この曲は過去を基軸にした物語となっている。

PV では小学校を舞台に子供たちが遊んでいる映像が流れていて、ラストでは一人の少年が鏡に手を合わせると、鏡に手を合わせている青年（少年が成長した姿と思われる）の映像となり幕を閉じる。歌詞は、少年時代を思い出しながら、二度とは戻らないあの時をなつかしみ、現在の友達あるいは恋人と、なぜあの時を共有できなかったのだろうという内容だと私は解釈している。インタビューでも藤原が語ってるように、過去の出来事が描か

れているのはもちろんであるが、過去を出発点として前に進もうという想いがこの歌には込められている。また、かけがえのない友達と 10 年という時を過ごすことができた過去に感謝していると藤原は語っており、その過去があるからこそ今があるのだと藤原は述べている。とてもさわやかな曲なので、感傷に浸りたいときやゆっくり過ごしたいときはこの「R.I.P.」を聞いてみてはいかがでしょうか？

BUMP OF CHICKEN が人気を伸ばした理由

BUMP の曲がなぜここまでたくさんの人に受け入れられたかということ、作詞、作曲を担当している藤原基夫の繊細な感性がそのまま歌にあらわれているところが大きい。

「天体観測」のサビで「見えないものを見ようとして、望遠鏡を覗き込んだ」というフレーズが出てくる。単純に考えると、星をみるために望遠鏡を覗き込んだということになるけれど、それだけではなくて藤原の宇宙という未知のものに対する好奇心や希望を感じさせる一文になっている。続いて、「暗闇を切り裂いて、いくつも声が生まれたよ。明日が僕らを呼んだって、返事もろくにしなかった」真夜中に天体観測をしているカップルが星をみつけて喜んでいる。明日のことも考えずに今に夢中になっている。このフレーズに出てくる暗闇とは、単純に夜の暗さではなくて、世の中の嫌なこと、絶望や逆境そういうものを表していると私は解釈する。その暗闇を切り裂くということはすなわち、希望という名の星をつかみとったということである。つまりこの天体観測という歌は、恋人と星をみたというだけの歌ではなく、世の中の理不尽さに対する希望を語っている歌なのである。絶望という暗闇に対してたちむかう弱者、まさに BUMP OF CHICKEN=臆病者の一撃である。

この歌のラストでは恋人を交通事故で無くした悲しみや苦しみ、絶望が描かれている。しかし絶望だけではなく、最後の最後で「イマというほうき星 君と二人おいかけている」といっているようにしっかりと希望が歌われている。世の中にはつらいことや悲しいことはたくさんあるかもしれないが、それでも「明日」は来ると藤原基夫は歌っている。暗いニュースが多い世の中で、こうした「希望」が歌われたことが天体観測の大ヒットにつながったのではないだろうか。

BUMP OF CHICKEN～30 歳という節目～

BUMP のメンバーは全員が同い年であり、今年で 30 歳の誕生日を迎えた。

20 代から 30 代になるにあたって、歌の表現が変わってきた。今までの曲は天体観測やハルジオンなど「現在」を基軸にして未来への希望を歌っている曲が多かったが、三ツ星カルテットでは「過去」を基軸にして「現在」に感謝するという歌がうたわれている。藤原の過去と未来と現在がすべてつながってイマがあるという想いがこの歌には込められている。また、三ツ星カルテットという曲のタイトルでもわかるように、星がキーワードになっている。藤原は宇宙に強い想いを抱いており、彼の死生観を表現するには宇宙が合っている

のだろうと解釈できる。今までは、現在を基軸とした未来への希望が歌われてきたが、これからは過去を基軸とした、感謝や希望という名の星が曲になって紡がれていくのだろう。

結論

BUMP OF CHICKEN は藤原元雄の持つ繊細な歌声と、疾走感のあるギターやドラムスによる明るい曲調によって圧倒的な支持を得てきた。なかでも一番大きな要因は歌詞にこめられた、未来に対する希望であり、宇宙をテーマにした藤原基夫の持つ価値観の表現である。BUMP の歌は宇宙をテーマにした曲が多い。それは宇宙という果てのない空間でしか表現できない「何か」があるからだろう。私は、それを未来に対する希望と書いたが解釈は人によって異なってくるだろう。いずれにせよ、藤原の持つ感性を曲を通じて感じるからこそ、あんなにも BUMP の歌に惹かれるのであると考える。

今回の論文では、藤原基夫が宇宙を通して伝えたい想いがあるということ、そしてこれからは過去を基軸にして希望という名の星を表現していくのだということが分かった。